

モバイル学会誌発刊にあたって

モバイル学会会長 赤松幹之
((独)産業技術総合研究所)

シンポジウム「携帯電話の利用性と人間工学」が開催されたのが 1998 年であり、翌々年には「カーナビ・携帯電話の利用性と人間工学」としてシンポジウムが行なわれました。ケータイやカーナビにいち早く注目して、この領域の研究を先駆的に始めていた研究者を集めたシンポジウムが始まってからおよそ 10 年が経ち、これらを母体として特定非営利活動法人としてモバイル学会が立ち上がりました。この間に、携帯電話は電話器としての機能を超えてケータイとなり、そしてスマートフォンが生まれ、タブレット型端末も登場しました。カーナビも一度使ったら手放せない機器になり、どちらも今の若者にとっては当たり前前に存在する機器となりました。これらが生活の中に入り込むことによって、単にどこにいても情報にアクセスできるという利便性だけでなく、その場でその情報が得られ、情報を発信できること、すなわちモバイルインタラクション自体が価値となることが理解され始めています。しかしながら、その功罪を含めて、これがどこに向かって進んで行くものなのか誰も知ることはできません。

シンポジウムの語源は、ギリシャ語で「飲む人達が集まること」という意味から転じて、知的な話し合いのために集まることです。そして、我々も様々な意見交換をするために集まり、議論をしてきました。一方、学会というものは、17 世紀の近代科学のおこりとともに登場しました。それまでアマチュアとして自然科学の探求をしていた人達が集まり、それぞれが得た知見を見せあい、議論する場として作られたものが学会です。そして現存する最も古い学会であるロンドン王立協会が、定期刊行物としての学会誌の発行を始めました。当時は自然科学という知的な探求が何を生み出すものであるか未だ分からない時代であり、それゆえに互いの知を印刷物のうえに蓄積することによって何かが見えてくるはずであるとの信念に基づいた活動でした。

モバイルインタラクションを研究対象としている我々にとっても、始まりは対話による意見の交換でしたが、ここに知見や意見を蓄積して友たる研究者や実践者に伝え、議論して未来に向かって行くための基盤としての学会誌を刊行することになりました。我々の対象は否応なく時代という荒波にもまれて行くことでしょうけれども、そのなかで進みながら進むべき道を見出して行かなければなりません。進みながらその知見や意見を発信し、受け取る場として、まさにこの研究領域のモバイルインタラクションの場として学会誌自身が機能を発揮し、先導していくことと確信しています。